

氏 名(本 籍)	杜	勤 (中 国)
学 位 の 種 類	教 育 学	博 士
学 位 記 番 号	博 甲 第 920 号	
学位授与年月日	平成 3 年 3 月 25 日	
学位授与の要件	学位規則第 5 条第 1 項該当	
審 査 研 究 科	体 育 科 学 研 究 科	
学 位 論 文 題 目	儒学における「体育」思想の研究	
主 査	筑波大学教授	教育学博士 成 田 十 次 郎
副 査	筑波大学教授	教育学博士 片 岡 暁 夫
副 査	筑波大学教授	教育学博士 高 野 清 純
副 査	筑波大学教授	鈴木 博 雄

論 文 の 要 旨

本研究は、中国古来の伝統的な思想体系である儒学に独特な人間の徳とそれに関わる文化との関連を分析することで、そこに潜在する体育思想を明らかにすることを目的とした思想研究である。そして、序章では儒学における体育思想を明らかにするために、その基本概念である教育思想、身体思想、体育思想についての先行研究の検討を行い研究課題を導いている。

儒学の教育思想に関する先行研究の検討から、①「教育とは何か」、「体育とは何か」という哲学的な問題に関する検討、および、②儒学の教育思想を独立した体系として明らかにすることを本研究の課題としている。また身体観に関する先行研究については調査の結果存在しないことが確かめられ、③先行研究の欠如という困難を越えて、儒学における身体観を明らかにすることをも研究課題としている。体育思想に関する先行研究の検討では、体育の手段である身体的運動を体育そのものとして指定するという問題点が指摘され、④本研究で明確になる儒学体育のなかに身体的運動を位置づけることをも研究課題としている。

上記の課題を解決するために 3 つの分析枠組みが設定されている。第一は教育概念と体育概念の関係で、体育概念を「身体」を種差とする教育概念の種概念とし、関数形式による分析枠組みを設定している。第二は身体について、「関係的身体」と「可能態としての身体性」という分析枠組みを設定している。第三は身体運動について、個人の「運動現象」、疎外態において存在する「運動様式」そしてそれらを組み込む儀礼としての「文化的システム」という分析枠組みを設定している。

儒学の基本文献としては、『易経』『書経』『詩経』『礼』『春秋』、および『論語』『孟子』、そして『荀子』を第一の底本としている。

本論の「第一章 教育的な諸概念の検討」では、儒学の基本文献から教育に関係する教育的概念を

抽出し、意義を明確にしている。

本章で主に論じられているのは、秩序ある人間社会の実現を目標とする諸概念（第1節）、徳ある者の形成を目標とする諸概念（第2節）、基本的な実践能力を目標とする諸概念（第3節）であり、考察の結果、これらの教育的概念から儒学における教育概念を理論的に構成できる可能性があると結論されている。

「第二章 教育概念の検討」では、教育概念の分析枠組みに従って「師」、「弟子」、「媒体」、「目標」の観点から儒学における教育概念を明らかにしている。

本章で主に論じられているのは、師と弟子の存在意識（第1節）、師と弟子を結ぶ媒体と目標との関連（第2節）、教育目標の構造（第3節）、教育体制（第4節）であり、考察の結果およそ次のようなことが明らかにされている。

師は教えることに徹し弟子は学ぶことに徹するところにそれらの存在意義があり、この教と学を媒介し目標である君子へと導く媒体の不可欠性がとらえられる。君子の存在意義は天下平において認められ、そこから君子と天下平という目標—目的の二元構造を明らかにしている。そしてその方法として、「知的」、「楽（感性）的」、「身体的」教育方法が教育体制の元で考えられていたことを明らかにしている。

「第三章 『関係の身体』に関する人間の諸徳とその社会的意義」では儒学における身体観が明らかにされている。

本章で主に論じられるのは、儒学における身体の位置（第1節）、関係の身体概念群の抽出とその意義および分類（第2節）、関係の身体に関わる諸徳の社会的意義（第3節）である。考察の結果およそ次のようなことが明らかにされている。

儒学の中では個人の身体が、社会における人間関係に位置付けられていた。この関係の身体は、内向的な「壯」「威」「勇」「剛」、外向的な「恭」「讓」といった諸徳の身体的現実化として追及される。そしてこれらの身体的概念には能力と徳という二重の社会的意義がある。

「第四章 体育概念の検討と運動様式の体育学的意義」では、分析枠組みに従って儒学における体育の意義が明らかにされる。

本章で主に論じられるのは、体育概念（第1節）、文化としての拱、揖、射、御とその社会的意味（第2節）、体育過程における拱、揖、射、御の体育学的意義（第3節）、および儒学的体育における射礼の位置づけであり、考察の結果、およそ次のようなことが明らかにされている。

師、弟子、運動様式からなる体育過程では、目標が君子であり、媒体である運動様式「拱」「揖」「射」「御」と文化的システム「射礼」を通して弟子が君子へと接近する。従って、運動様式の社会的意義は、実用から教養へと展開される。その体育学¹⁾的意義は、身体技法習得の媒体的契機と身体的諸徳の形成という目標的契機の二契機が含まれる。そして、体育過程での射礼は、秩序ある社会を象徴する「モデル」であり、君子たる人間の身体に関わる諸徳「壯」「威」「勇」「剛」「恭」「讓」、および人間関係に関わる「仁」「知」「孝」「弟」「忠」「信」「義」、および人間社会の最善性に関わる規範の「礼」、「最善性」に至る方法の「中庸」、「最善性」に至る目的的理念の「道」が総合的に求められる

媒体となり、これが「弟子」に身体的能力を前提とする身体技法を通して礼法を学ばせる根拠ともなっている。

儒学思想における理想的な人間像としての「君子」は、人間としての最高の「教養」をもつ者である。「君子」を目指す体育過程は、身体技法を通しての身体面からの人間的徳の獲得、さらにシステム化された礼法を通しての人間関係に関わる諸徳の獲得を実現しようとする。その実現可能性の指摘こそ、儒学における体育思想の「独自性」であると考えられよう。また、「射礼」というシステム自体が、人間の諸徳の全体構造の中に位置付けられていることに、こうした「総合性」の典型を見ることができるのである。

審 査 の 要 旨

本論文は、体育科学研究科への最初の中国人留学生である著者が文化大革命を経て世界へと開かれ始めた激動する祖国の社会情勢の中で、民族の思想的原点に立ち帰って自らの体育的立場を明らかにしようとする問題意識に支えられて、儒学思想に潜在していた体育観を明らかにしたものである。

研究課題を解明するにあたって、日本および中国の先行研究の収集やその批判はよく行われており、論文の構成も全体にわたって体系的で、適切であると考えられる。論文の記述も論理的であって論拠の明示も概ね妥当であるといえよう。原文の解釈も代表的な典拠に基づいており一応の水準で信頼できる。もとより儒学理解の深さや中国体育史における儒学の体育思想の位置づけなどに十分でない点もあるといえる。

以上のような残された問題はあるにしても、全体として本論文は儒学における体育の思想を究明することによって、近代体育として自覚される以前の時代に潜在する体育思想を明らかにする研究方法とその価値を表す新しい知見を示し、論文の課題解明に成功しているといえる。

よって、著者は教育学博士の学位を受けるに十分な資格を有するものと認める。